

研究報告

看護専門学校に在学する社会人学生の 学校生活に対する意識の構造について

The structure of the awareness of students of school life with a
social experience enrolled in nursing school

片山 美穂^{1) 2)}, 長谷川 雅美³⁾

Miho Katayama^{1) 2)}, Masami Hasegawa³⁾

¹⁾金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻博士後期課程

²⁾こまつ看護学校, ³⁾金沢医科大学看護学部

¹⁾Doctoral course, Division of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences,
Kanazawa University

²⁾Komatsu Nursing School, ³⁾School of Nursing, Kanazawa Medical University

キーワード

看護専門学校, 社会人学生, 看護教育, 意識

Key words

nursing school, student with social experience, nursing education, awareness

要 旨

本研究の目的は、看護専門学校に在学する社会人学生が看護専門学校に対して、どのような意識をもちながら学校生活を送っているかを明らかにすることである。研究参加者は、看護専門学校に在学する社会人学生10名であった。データ収集には半構成的面接法を用い、看護専門学校に対する思いを自由に語ってもらった。その後、逐語録を作成し、重要と考えられた部分を抽出し、それらをカテゴリー化した。最終的には、カテゴリー間の関連性を構造化した。その結果、次のことが明らかとなった。

社会人学生は【看護師になるという明確な目的意識】をもって看護専門学校に入学してきていた。看護専門学校では社会人学生という【自分の置かれている立場をわかまえる】態度をもち、自分に対する【自己肯定感】を感じていた。教育に対しては【専門職教育としての納得】をしながらも、【教育現場に対する不満】も感じており【看護教員に対する期待】をもっていた。社会人学生は看護専門学校とはこのようなものと自分の中で納得し、学校生活に適応しながら看護師資格を取得するという目的達成を第一に考えて学んでいた。

はじめに

看護師養成所の動向をみると、2015年の看護系大学は短期大学も含めると278校、3年課程の看護専門学校は547校であった¹⁾。学校数の増減をみると、大学は増加傾向、短期大学は減少傾向、看護専門学校は横ばいである。また、2014年4月の入学生数については、看護系大学22,512名、看護専門学校27,595名であり¹⁾、看護専門学校の入学生数については、多少の増減はあるがほぼ横ばいである。以上のことから、看護師養成は大学教育が主流となり増加しているが、看護専門学校での養成者数も全体の半数を占めており、今後も看護専門学校での看護師養成は継続されていくことが予測される。

看護専門学校における看護学生の動向をみると、社会人経験のある受験生が年々増加傾向にある。2015年度の高卒卒業後新卒で入学してきた学生(以下、新卒学生)は、看護系大学が19,096名(84.8%)、看護専門学校が20,068名(72.6%)であった²⁾。看護系大学では約15%が、看護専門学校では約30%の学生が、進学または就労等の経験の後に看護師を目指して入学してきている社会人学生であることがわかる。

看護専門学校に入学してくる社会人学生の増加とともに、社会人学生を対象とした調査や研究もなされている。西谷³⁾は、入学直後の社会人学生に対して質問紙調査を実施し、社会人学生は看護職となるという明確な意思をもって入学してきていることを報告している。甘佐ら⁴⁾は社会人学生を対象に半構成的面接を行っている。その結果、社会人学生は職業人としての自立や一生働ける仕事に就きたいという思いをもっていること、多くが入学後も看護専門学校を辞めたいと思ったことはないという答えを得ている。他方、社会人学生は看護専門学校における教育や教員に対して何らかの不満等をもっているようだが、具体的な内容については明らかにしていない。小川ら⁵⁾は質問紙調査を行い、社会人学生は新卒学生より、学習意識や学習行動が強いことを報告している。前田⁶⁾も質問紙調査により、社会人学生は新卒学生と比べて、クラスメートへ気遣いをしながらもより充実した学校生活を送っていると述べている。しかし、質問紙調査の中の自由意見欄では、教員に対する否定的な意見を見出しているが、その詳細については検討していない。2010年以降の社会人学生を対象とした面接調査の結果をみると、社会人学生は指導の内容より評価を気にしてい

た⁷⁾。また、看護師になりたい思いが学校を続けさせ^{8) 9)}、看護基礎教育への改善要望があり¹⁰⁾、教員との関係性が学校生活上の困難としてあがっていた⁹⁾。そして、社会人学生は肯定的に自分を認識していた¹¹⁾。しかし、看護専門学校に在学する社会人学生が、どのような意識をもちながら学生生活を送っているかに焦点を当てた研究は見当たらない。

看護専門学校においてはまだまだ新卒学生に焦点を当てた教育が続けられていると感じられる。そのため、社会人学生は新卒学生中心の看護教育や学校生活にさまざまな戸惑いや不満を感じているのではないかと考えられる。しかし、以上述べた報告からは、それらの点については十分な検討がされていないと考える。

そこで本研究では、看護専門学校に在学する社会人学生が、どのような意識をもちながら学校生活を送っているかを明らかにすることを目的とする。本研究では、社会人学生とは「大学・短期大学の卒業後または就業経験の後、看護専門学校に入学してきた学生」とした。また、本研究で用いる意識とは「物事や状態に気づき、知ったこと、あるいは気にかかったこと」とした。

本研究から、社会人学生のもつ、看護教育や学校生活に対する意識のうち、戸惑いや不満が明らかになることによって、社会人学生への教育のあり方や効果的な支援の方法について示唆を得たいと考える。

研究方法

1. 研究参加者

看護専門学校に在学する社会人学生とした。なお、大学・短期大学は卒業しているが、就業経験が無い者も社会人学生とした。それは高校卒業後、いったん看護ではない別の道に進んだ後、看護専門学校に入学してきた点では同じと考えたためである。

3つの看護専門学校(独立行政法人、公立、私立)の代表者から社会人学生を紹介してもらい、第一著者が候補者に対して本研究の説明をし、研究参加の同意を得ることのできた10名を選定した。研究参加者は、候補者の都合のよい時間に、候補者の在学する看護専門学校の個室で紹介を受けた。

対象者の背景は、男性3名、女性7名であった。平均年齢は30.8歳であった(表1)。研究参加者10名のうち、7名は大学または短期大学を卒業しており、また8名は就業経験があった。学年は3

表1 研究参加者の背景

| ID | 性別 | 年齢 | 大学・短期大学での教育 | 就業経験 |
|----|----|-----|-------------|------|
| 1 | 女 | 20代 | あり | あり |
| 2 | 女 | 30代 | あり | あり |
| 3 | 男 | 20代 | なし | あり |
| 4 | 男 | 20代 | あり | なし |
| 5 | 女 | 30代 | あり | あり |
| 6 | 女 | 20代 | あり | なし |
| 7 | 男 | 30代 | なし | あり |
| 8 | 女 | 30代 | なし | あり |
| 9 | 女 | 30代 | あり | あり |
| 10 | 女 | 20代 | あり | あり |

表2 インタビューガイド

社会人学生に対する質問

1. 看護専門学校に入学する時、どのような期待あるいは目的がありましたか。
2. 看護専門学校の学校生活全般で、何か感じることはありますか。
3. 看護専門学校での看護教育と、大学・短期大学での教育や就業経験とを比較して、感じていることを何でもお話し下さい。
4. 看護専門学校での看護教育に、どのような対応を望みますか。

年生1名、2年生5名、1年生4名であった。

2. データ収集方法

2010年4月－6月に、各研究参加者が在学する看護専門学校の個室において、半構成的面接を行った。面接は表2に示したインタビューガイドに基づいて「入学時の目的や期待」、「学校生活全般で感じること」、「大学・短期大学での教育や就業経験と比較して感じていること」、「看護教員へ望む対応」について尋ねた。

面接は1回行い、面接に費やした時間は平均47分(32分～79分)であった。面接内容は承諾を得た上で録音した。

3. 分析方法

録音による面接内容から逐語録を作成した。次に逐語録を精読し、研究参加者が看護専門学校で感じていることに関して重要と思われる部分を抜粋し、コード化した。そして取り出したコードの類似性と差異性を比較検討し、共通する意味内容に沿ってカテゴリー化した。各カテゴリーは比較検討しながら、カテゴリーの再編、移動、統合を繰り返し行い抽出した。最終的に全カテゴリー間の関連性を検討し、社会人学生の看護専門学校の学校生活に対する意識を構造化した。

またデータ分析過程において、質的研究の経験に富んだ研究者にスーパービジョンを随時受け、逐語録に戻りながら分析内容を検討・修正していき、結果の真実性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

本研究は金沢大学医学倫理委員会の承認(承認番号255)を受け、研究協力校の承認を得てから実施した。研究への参加は自由意思によるものとし、研究参加者および研究参加校の学校長と教務責任者に、本研究の趣旨、研究参加の自由、研究不参加による不利益が生じないこと、研究参加者への人権的配慮とプライバシーの保護には最大限配慮すること、データは研究終了後直ちに破棄することについて、文書と口頭にて説明し同意を得た。また研究実施場所を研究者の所属する施設とした場合でも、研究参加者の選定には関与せず、面接内容が研究参加者の学業成績等への影響がないことを保障するために、科目評価終了後に面接を実施した。

面接に関しては、研究参加者の教務責任者および研究参加者本人と調整し、授業等に支障が出ない時間を選定した。また、研究参加者の都合を配慮して面接時間を調整すること、疑問や質問には

いつでも応じること、問題が生じた際には研究者といつでも連絡がとれること、語られた内容は対象が特定されないように匿名化・記号化を図ることなどを保障した。また得られたデータは厳重に保管し、本研究のみに使用し、研究終了後には直ちに破棄することを伝え、面接内容を録音することについても同意の確認をした。

結 果

分析の結果、180のコード、19のサブカテゴリーから、6つのカテゴリー【看護師になるという明確な目的意識】、【自分の置かれている立場をわかまえる】、【自己肯定感】、【専門職教育としての納得】、【教育現場に対する不満】、【看護教員に対する期待】が抽出された。

以下、各カテゴリーについて説明する。文中では、カテゴリーを【太字】、サブカテゴリーを〈 〉、代表的なコードを〈 〉、研究参加者の語りを「斜体」、研究参加者のIDを（ ）で示す。

カテゴリー1【看護師になるという明確な目的意識】

〈社会人としての確かさを求めて看護職を目指している〉、〈必ず看護師にならなければいけない思いがある〉、〈時間を惜しんで勉強している〉の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

〈社会人としての確かさを求めて看護職を目指している〉では、社会人学生はこれまでの経験から、〈経済基盤を持ちたい〉、〈現職の将来への不安〉、〈将来のことを考えて、自己実現をめざす〉といった感情で入学していた。

「一生働けますんで、それと全国どこでも働けるので、自分さえしっかりしていれば、ずっと働けると思ったので、資格とろうと思いました。」(10)

〈必ず看護師にならなければいけない思いがある〉は、社会人学生は〈何か人より遅れていると感じる〉、〈前の仕事に追いつくというより超えたい〉、〈転職の最後のチャンス〉というコードで構成されていた。

「じゃあ他にどんな仕事があるかなあって思って、例えば今私30代なんですけど、もうすぐ40歳ってことで、定年が60歳くらいとしたら、もう20年あるって、今まで20歳ぐらいから働き始めて真ん中くらいなんですね。また残りは違うことをしても行けるかなあっていうか、もうここで変えても最後のチャンスぐらいかなあって思って」(9)

〈時間を惜しんで勉強している〉では、社会人

学生は〈したいことをせずに看護の勉強をしている〉、〈時間を惜しんで勉強している〉と看護の勉強に貪欲に取り組んでいる姿があった。

「高卒であがってきた子はわりと、休み時間遊んでいたりとかするんですけど、社会とか一旦出た人は真面目に空いた時間も勉強してたりとか見たりするんですよ。」(6)

カテゴリー2【自分の置かれている立場をわかまえる】

〈自分たちはイレギュラーだという意識がある〉、〈不安はあったが今はなんとかなっている〉、〈クラスメートと看護教員から社会人学生として期待されていると感じる〉の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

〈自分たちはイレギュラーだという意識がある〉では、社会人学生は〈社会人学生は中心的存在ではないと考えている〉、〈でしゃばって新卒学生の学ぶ機会を奪ってしまうのは申し訳ない〉、〈社会人学生は遠巻きに見ている〉と考えていた。

「私は主役はあの子達だっという思いがあって、自分はイレギュラーなものっていう意識があったんで、あの人たちが学ぶ、勉強以外で資格だけ取りに来てるわけじゃない、私は資格だけ取ればいいんですけど、もし自分が年上っていうことで、例えば何か指図したりとか、年の功みたいところがあって、18歳19歳の子よりはわかってるところはあると思うんで、なんでも、先回りして、わかるからって先回りしてなんかしてしまうと、あの人たちが学ぶ機会を奪うようなことがあったら申し訳ないなあっていう気持ちがあるんで」(9)

〈不安はあったが今はなんとかなっている〉では、社会人学生は〈体力的な不安〉、〈生活リズムの切り替えがうまくいか不安〉、〈金銭面への不安〉、〈社会人学生は柔軟性がない〉という不安を感じていたが〈人間関係の不安は入学後解消された〉、〈疎外感はない〉と解消されていた。

「(不安は) 変わらないと言えは変わらないですけど、無くなったといえは無くなりました。おかげさまで友達もできましたし、授業は精一杯何とか付いていけるかなあみたいな感じですね。」(5)

〈クラスメートと看護教員から社会人学生として期待されていると感じる〉は、社会人学生自身は〈クラスのまとめ役〉、〈社会人学生は頼りになると思われている〉、〈リーダーシップを求められている〉、〈クラスメートからのプレッシャーを感じる〉、〈授業がうまく回らないと焦って

しまう」というコードで構成されていた。

「リーダーシップ、学校全体を引っ張るくらいのリーダーシップを発揮してもらうことを求められているんじゃないかっていうのはあります。」

(3)

カテゴリー3【自己肯定感】

「社会経験は看護師を目指している自分にプラスに作用している」、《看護師を目指して勉強していることは前進である》の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

《社会経験は看護師を目指している自分にプラスに作用している》では、社会人学生は、〈責任の持ち方を知っている〉、〈社会人学生はあたり前の行動ができる〉、〈人とのかわり方はうまい〉、〈いろいろな方向から見るができる〉、〈社会経験は看護の土台になる〉、〈社会人体験はマイナスではない〉と表現していた。

「多少なりともプラスになると考えていますけど。人間関係とか、仕事っていうものの考え方が、新卒学生に比べれば、取り組み姿勢っていうのもちょっと違うと思うんで、すんなり入っていけるかなあって自分で思っているんですけど。」(7)

《看護師を目指して勉強していることは前進である》では、〈自分の人生を考えると前進〉、〈社会人のころより前進〉、〈新しいことに踏み出したので前進〉と考えていた。社会人学生は看護師を目指している現状を肯定的にとらえていた。

「自分の中では前進ですね。自分は一応目的をもって入って未来のために入って来ているので、自分の人生を考えると後退ではなくて前進なんですよね。」(10)

カテゴリー4【専門職教育としての納得】

《厳しさは専門職業人育成の場として納得できる》、《看護教員はプライベートに立ち入らない》、《看護教員の関わりに新卒学生との差は感じない》の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

《厳しさは専門職業人育成の場として納得できる》では、〈看護専門学校は何事にも厳しい〉、〈社会常識・学問への取り組みは高い〉、〈専門学校なので厳しくても納得できる〉と、専門職業人育成の場なのだから厳しいのは当たり前と感じていた。

「やっぱり専門学校なので仕方ないのかなあという思いをしますけど。出席とか単位とか厳しかったりするの、それは納得できます。」(2)

《看護教員はプライベートに立ち入らない》では、社会人学生は〈深くかかわってこないことは

ありがたい〉、〈プライベートな面に関する制約は感じない〉、〈放って置かれているがそれでいい〉と必要以上の関わりやプライベートへの関わりがないことを肯定的に評価していた。

「看護教員はプライベートなところに立ち入ってきません。あまり深く関わっては来ないですね。ありがたいなあって思いますね。」(5)

《看護教員の関わりに新卒学生との差は感じない》では、社会人学生は〈看護教員の授業中の対応は平等と感じる〉、〈新卒学生とのかかわりの差は感じない〉と看護教員から新卒学生と区別されているとは感じていなかった。

「ないですね。頼み事、教室にもものを持って行くのも係が決まっていますし、特に差は感じませんね。授業中も特に気になったことはないですね。先生は特に区別してはいないと思います。」(4)

カテゴリー5【教育現場に対する不満】

《態度の悪いクラスメートは迷惑である》、《社会人学生への憤りを感じる》、《看護教員は威圧的でパターンリズムでかかわってくる》、《指導が納得できないときは自分の中で収めた》の4つのサブカテゴリーから構成されていた。

《態度の悪いクラスメートは迷惑である》では、社会人学生は〈社会人学生は真剣に取り組むが新卒学生はとりあえずという感じ〉、〈入学してきた人に考え方が甘い人がいる〉、〈新卒学生は授業態度が悪く社会人学生にとっては迷惑〉、〈当たり前ことができいなため時間を無駄にしている〉と態度の悪いクラスメートに不満を感じていた。

「最初はやっぱり授業が始まってもなかなか静かにできないっていうことが、今はなくなったんです。ちょっと大人になったのかわからないんですけど、1年生の最初の頃はすごくうるさくて、自分は勉強しに来てるっていう気持ち強い。私はおんなじ歳の時ぐらいももしかしたら、私は授業中しゃべることはあんまりなかったと思うんですけど、そういう年代過ぎているんで、やっぱり勉強しようと思って来ているけど、若い子はまだ青春真っ只中なので、すごく最初はやかましいって。」(9)

《社会人学生への憤りを感じる》では、同じ社会人学生に対して〈社会人学生にもしゃべる人がいて不思議〉、〈社会人学生でもいろいろいる〉、〈社会人学生が常識をもっておらず憤りを感じる〉と、常識的に行動できない姿に憤りを感じていた。

「しゃべるのは、社会人の人もいますよ。それ

が不思議で。漫画読んでる、化粧している、授業中に。社会人の行為としては考えさせられませんか。それを普通に社会人の人もしているんです、高校を出た人も。」(5)

《看護教員は威圧的でパターンリズムでかかわってくる》では、社会人学生は看護教員に対して〈看護教員は威圧的〉、〈決め付けや強制はしてほしくない〉、〈学校・看護教員は一方的〉と感じていた。

「これはこうっていう決め付けや強制はしないで欲しいと思います。」(1)

《指導が納得できないときは自分の中で収めた》では、少々納得のいかない出来事があったとしても騒ぎ立てることはせず、〈納得はできないが我慢している〉、〈納得というより自分を収めた〉と対処していた。

「それを先生に言うっていうよりも自分の中で収めて納得して置いておくっていう。それは私の態度なんでしょうけど、なんかこうそれを学校に言って、変えて欲しいとかいう気はそんなになくて、まあ嫌だなあと思いつつ、まあまあ、しょうがないかなあって。」(9)

カテゴリー6【看護教員に対する期待】

《新卒学生と平等にすべて教えてほしい》、《大人の扱いで指導してほしい》、《看護教員は必要なことをきちんと教えるべきだ》、《学生個々の考え方とスタイルは尊重してほしい》の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

《新卒学生と平等にすべて教えてほしい》では、〈授業は新卒学生と対等でいい〉、〈社会人学生だからと省略しないでほしい〉、〈看護師にするつもりで指導してほしい〉、〈社会人学生だからと気を使う必要はない〉と、学生として看護師に必要なことは教えてほしいと考えていた。

「それぞれの社会人にしても差がありますよね。どんな社会人生活を送ってきたかにもよるし、性格にも差があるし、それを看護師の入口まで先生方がもってかなきゃいけないんだから、あんまりその遠慮しないで、普通に看護師にしてくれるつもりで、だめなところははっきり叱って欲しいし、っていうふうに思うんです。」(9)

《大人の扱いで指導してほしい》では、〈子ども扱いされていて苦痛〉、〈勉強以外には口出ししないでほしい〉、〈全体的に大人として扱ってほしい〉、〈もう少し信頼してほしい〉、〈看護教員は世話を焼きすぎる〉と考えていた。

「社会人というよりも全体的に、大人扱いし

てもらえれば、社会人を含めて、社会人がいようが若い子がいようが構わずに大人として扱ってあげれば、(学生が) 楽だったかなあって。」(9)

《看護教員は必要なことをきちんと教えるべきだ》では、〈看護教員が何も言わないのが不思議〉、〈看護教員は新卒学生に社会人としての必要なことを自覚させるべき〉、〈看護教員は新卒学生にもっと注意してほしい〉と、看護教員に教育者としての教育態度を要求していた。

「先生はそこはもっと高校とは違うんだからもっと厳しく、もっとこれから看護師となっていく上で、どうしても必要なものとか人間として社会人として世の中で働くために必要なものを本人に自覚させるためにも、先生はもっと厳しくしたほうが良い」(5)

《学生個々の考え方とスタイルは尊重してほしい》では、社会人学生は〈社会経験を生かせるアドバイスがほしい〉、〈社会人学生のやり方やスタイルを尊重してほしい〉、〈築いてきたライフスタイルを尊重してほしい〉と望んでいた。

「特別扱いは特にする必要はないと思います。わからないんですけど私の考えでは、社会人は自分のスタイルが結構決まっていたり、勉強するスタイルにしろ生活のスタイルにしろあると思うんですけど、例えば先生方がすごいご厚意でこういうふうな勉強をして下さいっていう、それを宿題とはまた別にしてこういうことを、先生方は学生のためを思ってやってるんですけど、社会人の方は自分のしたい勉強のスタイルとかがあったりするので、学生に任せる部分は学生に任せて、任せてしまえばいいと思いますね。」(10)

図1に、社会人学生の看護専門学校の学校生活に対する意識全体の構造を表現した。人型の図で社会人学生を表現し、社会人学生が自分自身に感じていることは人型の図の中に示した。そして、その人型の図の横には、社会人学生の看護専門学校・看護教育に対する意識を四角で囲み示した。

【教育現場に対する不満】と【看護教員に対する期待】の2カテゴリーに関しては、継時的な変化を示した。

社会人学生は【看護師になるという明確な目的意識】をもって看護専門学校に入学してきていた。看護専門学校では社会人学生として【自分の置かれている立場をわきまえる】態度をもち、自分に対する【自己肯定感】を感じていた。看護専門学校に対しては【専門職教育としての納得】をしながらも、【教育現場に対する不満】も感じており【看

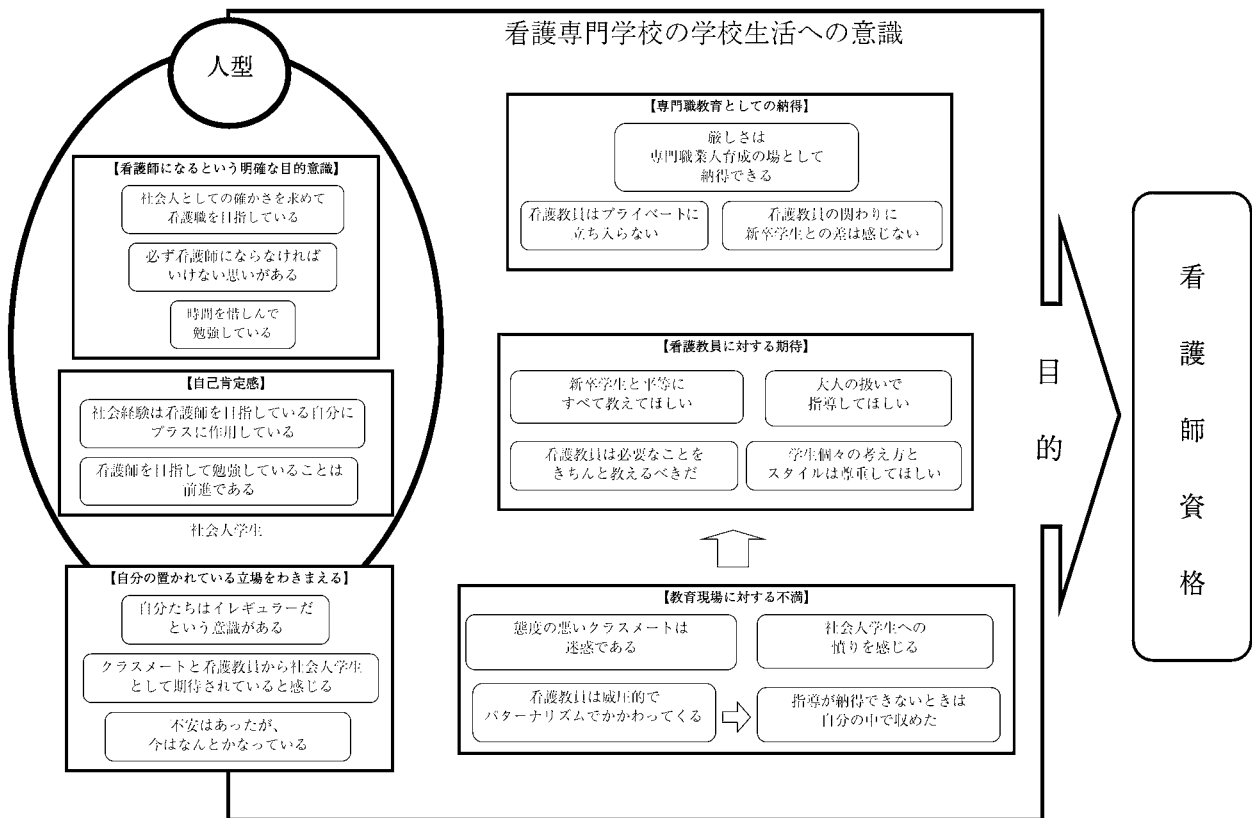


図1 社会人学生の看護専門学校の学校生活に対する意識の構造

【看護教員に対する期待】をもっていた。学生は看護専門学校とはこのようなものと自分の中で納得し、学校生活に適応しながら看護師資格を取得するという目的達成を第一に考えて進んでいた。

考 察

本研究では、社会人学生がどのような意識をもちながら学校生活を送っているかについて検討した。

平出ら¹²⁾は、社会人学生は明確な目的意識が今の学びを喚起しており、後がないために合理的に学んでいると述べている。その後、西谷³⁾も社会人学生の明確な意思について報告している。魚住⁸⁾は、社会人学生は、学習への満足感や努力している自分の姿、看護職をめざす動機が学び続ける原動力になると述べている。本研究においても、同様のことが言えた。社会人学生は【看護師になるという明確な目的意識】をもって、看護専門学校に入学してくると考えられる。これは自立した社会人として再出発したいと強い意識の表れであると考えられる。《社会人としての確かさを求めて看護職を目指している》では、社会人学生はこれまでの経験から、〈経済基盤を持ちたい〉、〈現

職の将来への不安〉、〈将来のことを考えて、自己実現をめざす〉と感じて入学してきていた。これまでの仕事は自分で選択した職業ではあっても、経済的な不安や将来への不安を感じていた。社会人として自立した、納得できる自分の姿を求め職業選択のやり直しを決意していた。やり直しができない覚悟と必ず看護師にならねばならないという決意をもって、看護専門学校での生活を送っていると言える。そして、過去の自分を悔やむこともなく、過去の社会経験も受け入れながら、社会人学生は、《社会経験は看護師を目指している自分にプラスに作用している》、《看護師を目指して勉強していることは前進である》と【自己肯定感】をもって、看護専門学校での勉強に励んでいる姿が伺える。社会人学生は、過去の社会経験や現在の学生としての自分を肯定的に捉えていた。一方で、井澤⁷⁾は、社会人学生は自分がリーダーシップをとることで他の学生の学ぶ機会を奪っているのではと感じていると述べている。また、根岸¹¹⁾は、社会人学生は、看護専門学校で学ぶ自分自身に対し、学び続ける強い意志をもち、新卒生と折り合いをつけて学んでいると述べている。本研究でも、社会人学生は、【自分の置かれ

ている立場をわきまえる】ことをしていた。社会人学生は、自分たちは中心的存在ではないと自覚し、でしゃばらず、新卒学生を見守っている姿があった。

そのため、専門職業人を育成するための厳しさに対しても、【専門職教育としての納得】はしていると考えられた。武森ら¹³⁾は、社会人学生は専門職教育は厳しいと感じているが、納得していると述べている。本研究においても同様の結果であった。他方、社会人学生は、さまざまな【教育現場に対する不満】はもっていた。迫田ら⁹⁾は、就業上の困難として、新卒学生との関係性、教員との関係性をあげている。本研究でも、【教育現場に対する不満】として、一つは、同じクラスメートに対する不満である。例えば、自身が一生懸命勉強しようとしても、態度の悪いクラスメートがおり、それを迷惑と感じていた。他の一つは、看護教員に対する不満である。前田⁶⁾が理解してくれない教師と述べているように、本研究においても看護教員に対してさまざまな思いを抱えていた。看護教員は威圧的でパターンリズムでかわってくると感じており、そのような教育方法と態度に対して決めつけや強制はしてほしくないと看護教員に対する不満を感じていた。三木ら¹⁰⁾は、社会人学生は、看護基礎教育に対して改善要望を持っているとしている。本研究でも、社会人学生は【看護教員に対する期待】をもっており、看護の勉強は新卒学生と平等に教えてほしいことや成人学習者として扱ってほしい、個々の考え方を尊重してほしいなどの期待である。しかし、社会人学生は目的がはっきりしているため、それらの不満や期待に対する具体的な行動化を起こすことなく、我慢して自分の中で収めていることが明らかとなった。これまでの研究^{4) 6)}で社会人学生の抱えている不満や期待等が具体的に浮上してこなかった理由がここにあるとも考えられた。迫田ら⁹⁾は、看護師になることへの思いが学業を継続させているとしている。社会人学生は看護師資格の取得という明確な目的に向かって進んでいる姿があった。

さらに、社会人学生は、看護師資格を取得することのみに意識が向いているわけではなかった。平出ら¹²⁾は、社会人学生は自分自身の色を出さないように、集団の中で日々目立たぬように“カメレオンの存在”でいようとしていると述べている。本研究においては、社会人学生は、でしゃばって新卒学生の学ぶ機会を奪ってしまうのは申

し訳ないと思いながらも、例えば授業がうまく進まない状況に陥った場合にはクラスのまとめ役を果たしたり、求めに応じてリーダーシップの役割を果たしたりしていた。すなわち、クラス運営や授業がうまく進むように、新卒学生や看護教員の期待に応えるべく行動していた。このことから社会人学生は周りになじみ潜んでいるカメレオンの存在というよりは、むしろクラス運営や授業が最良の状態となるよう、クラスメートや看護教員に配慮しつつ、協調しようと陰で支える“黒子的存在”であると考えられることができる。

以上述べたことから、明確な目的意識と自己肯定感をもち、立場をわきまえ、周りを気遣いながら、看護専門学校で起こる様々な出来事に適応し、看護師資格を取るという目的達成に向かって進んでいる社会人学生像を描くことができる。社会人学生は学校生活で起こる様々なことに関しては気にはなっていない、変化させるための行動は起こしていない。社会人学生は、看護師資格を取得するという目的達成に向かって、周囲に調和できるための工夫をしていたといえる。看護教員はこのような社会人学生に対して、目的が達成できるように支援していくことが必要である。看護教員は社会人学生に対して、過度に期待せず、個別性を尊重し、看護の学習に関しては新卒学生と平等に関わっていくことが必要であろう。社会人学生は、新卒学生とは異なり、周りに対し、配慮し協調しようとする意識をもっていることから、我慢も生じやすいと考えられる。そこで、看護教員は社会人学生に対し、学習に関しては新卒学生と平等に関わりつつ、学校生活で感じていることを表現できる場や話し合いの機会を設けるなど、新卒学生とは異なる対応と配慮が必要であると考えられる。

研究の限界と今後の課題

本研究は、特定の地域の看護専門学校で行った。したがって、この結果は看護専門学校の背景や研究参加者の背景、社会人学生の割合なども関係しておりすべてを一般化することができない限界がある。さらに継続的なサンプリングを重ね、データの質を深め、社会人学生の背景を考慮した調査を続けていくことが今後の課題である。

また、教育する側にいる看護教員の社会人学生に対する意識の調査は今回行っていない。看護教員が社会人学生に対しどのような思いを持って教育に当たっているかの意識の調査をすることによって、双方の意識を活かした看護教育のあり方が

検討できると考える。

結 論

社会人学生は【看護師になるという明確な目的意識】をもって看護専門学校に入学してきていた。看護専門学校では社会人学生という【自分の置かれている立場をわきまえる】態度をもち、自分に対する【自己肯定感】を感じていた。教育に対しては【専門職教育としての納得】をしながらも、【教育現場に対する不満】も感じており【看護教員に対する期待】をもっていた。社会人学生は看護専門学校とはこのようなものと自分の中で納得し、学校生活に適應しながら看護師資格を取得するという目的達成を第一に考えて学んでいた。

このような社会人学生に対し、看護の学習に関しては新卒学生と平等に関わりつつ、一方、学校生活で感じていることについては新卒学生とは異なる対応と配慮の必要性が示唆された。

謝 辞

本研究に協力して下さいました研究参加者の皆様に心より感謝いたします。なお、本研究は金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

利益相反

利益相反なし。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査 定員、学校養成所区分別、設置主体別，[オンライン，<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001139988>]，厚生労働省ホームページ，5. 2. 2016
- 2) 厚生労働省：看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査 学校養成所入学状況，[オンライン，<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001139997>]，厚生労働省ホームページ，5. 2. 2016
- 3) 西谷千恵：大卒社会人経験者が看護専修学校入学に至る経緯，日本看護学会論文集：看護教育，34，109-111，2003
- 4) 甘佐京子，藤田きみゑ，牧野耕次：看護学生の学校適応と心理的特徴 社会人経験を持つ看護学生を対象として，滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌，6，57-63，2002
- 5) 小川麻代，坂井恵子，白山敦子：社会人入学した看護学生の自己教育力、学習意欲・行動の実態-2年課程における社会人入学生とストレート学生の比較，日本看護学会論文集：看護教育，34，106-108，2003
- 6) 前田幹香：社会人経験を持つ看護学生の学校生活に関する認知の特性，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録，29，123-129，2004
- 7) 井澤晴美：主体的に学習できる社会人学生が教員に望む指導，JCHO東京新宿メディカルセンター附属看護専門学校紀要，1(1)，1-8，2015
- 8) 魚住郁子：社会人経験のある看護学生が学校生活の中で学び続けていくプロセス 学びの深化に関わる体験の語りに注目して，日本看護学教育学会誌，25(1)，41-50，2015
- 9) 迫田智子，梅田尚子，清水るみ子：社会人経験のある看護学生の就学上の困難と学業継続への対処，日本看護学会論文集：看護総合，44，321-324，2014
- 10) 三木隆子，關戸啓子，檀原いずみ：社会人経験をもつ3年課程看護専修学校生の学習支援のあり方 社会人学生と教員に半構成的面接を行って，*International Nursing Care Research*，13(3)，155-165，2014
- 11) 根岸貴子：社会人経験を持つ学生が看護専門学校で学ぶことの認識，日本看護学会論文集：看護教育，42，26-29，2012
- 12) 平出恵子，広瀬京子，関口千嘉子：看護専門学校で学ぶ社会人入学生が語る学びの様相，日本看護学教育学会誌，15，270，1991
- 13) 武森八智代，竹村多加，信里ユリエ：社会人経験を持つ学生の看護専門学校で学習することの意味，中国四国地区国立病院附属看護専門学校紀要，3，91-103，2007